

ライティングセンターの利用のきっかけと 継続的な利用の関連についての量的分析

西浦 真喜子 小林 至道 毛利 美穂

関西大学教育推進部

1. 問題と目的

近年、大学生の文章作成力の低下が懸念されるとともに、ライティングセンター（以下、センター）やそれに類するライティング支援機関を設置する大学が増加している。各大学におけるセンター設置の目的はさまざまであろうが、その多くは文章の添削ではなく、「書くプロセス」を支援することである（佐渡島・太田, 2013）。学生は、文章を書く前、文章を書いている途中、書いた後など、さまざまな段階でセンターを利用する。

学生がセンターに相談に来るきっかけは、大きく2つに大別できる。1つは、教員の指示によるものと、もう1つは自発的なものである。前者の学生は、文章を改善する気が乏しかったり、利用が継続されなかったりする場合があるなどの問題が指摘されている（野村他, 2015）。しかし、教員の利用指示が必ずしもラボの利用にネガティブな態度を持つ学生を生むわけではない。センターの目的は、チューターと対話することを通して、学生自身が抱える文章作成上の問題やその改善点に気づくことである。文章作成支援において、この目的が達成されれば、利用のきっかけが何であったとしても、継続的かつ効果的なセンターの利用が期待できると考えられる。

そこで、本研究では、センターの利用が教員指示によるものか否かという利用のきっかけが、課題の進行状況やその後の継続的な利用とどのように関連しているのかを検討する。関西大学のセンターであるライティングラボ（以下、ラボと省略）の利用者データを用いた量的分析により、利用のきっかけと継続利用の関連を明らかにする。なお、本研究は、平成24年度に文部科学省に採択された大学間連携共同教育推進事業「<考え、表現し、発信する力>を培うライティング/キャリア支援」によりデータを収集した。

2. データについて

対象 2015年度春学期（ラボの開室期間は4月20日（月）～7月31日（金）の71日間に、ラボに相談に来た学部生728名（延べ人数）を分析対象とした。

分析に用いた変数 ラボに相談に来た学生のデータはすべて「TEC-system」に蓄積されている。TEC-systemは、ラボの予約機能を備えたWEBシステムである。学生は、ラボで相談する際、TEC-systemで課題の進行状況・課題の提出日・相談したいことなどを入力する。また、相談開始前には、学生がラボを利用するきっかけなどを申込用紙に記入する。本研究では、TEC-systemのデータと申込用紙の内容から、「これまでの利用回数」「その後の継続利用回数」「利用のきっかけ」「課題の進行状況」という変数を抽出し、分析に用いた。利用のきっかけは、「先生からの指示で」「友人・先輩・後輩に聞いて」「チラシや掲示を見て」「以前利用したので」「Webサイトを見て」「その他」から複数選択、課題の進行状況は「1. まだ書いていない」から「5. ほぼ完成した」までの5段階から1つを選択させた。

3. 結果と考察

ラボ利用学生の基礎統計 当該期間にラボを利用した学生数、および利用のきっかけと状況を Table 1~3 に示す。これらの学生のうち、「初めて」ラボを利用した 380 名の学生を以降の分析に使用する。

Table 1 ラボ利用回数別の度数と割合

	度数(人)	割合(%)
初めて	380	52.20
2回目	166	22.80
3回目以上	178	24.45
不明	4	0.55
合計	728	100.00

Table 2 利用のきっかけ別の度数と割合

	度数(人)	割合(%)
先生の指示で	458	62.90
友人・先輩・後輩に聞いて	65	8.90
チラシや掲示を見て	85	11.70
以前利用したので	163	22.40
Webサイトを見て	51	7.00

Table 3 利用状況の平均値と標準偏差

	N	平均値	標準偏差
課題の進行状況	662	3.46	1.37
継続利用回数	728	1.14	2.71

教員指示による利用かどうかによる検討 教員の利用指示があった者は 282 名、なかった者は 98 名であった。両者に継続的な利用回数の差があるかを検討するため、対応のない t 検定を行った。その結果、両者に有意な差はみられず ($t(378)=-0.64, n.s.$)、教員の指示による利用でも、自発的な利用でも、その後の継続的な利用回数に差がないことが示された (Table 4)。また、課題の進行状況を同様に比較したところ、有意な差がみられた

($t(337)=5.90, p<.01$)。教員の指示でラボを利用した学生は、比較的課題が進行している状況で相談に来ていた。ラボと連携した授業は、レポートの書き方を指導する初年次教育科目が主であり、ある程度授業で指導を受けた文章の相談が多くなったためだと考えられる。

継続利用したかどうかによる検討 ラボの 1 度目の利用の後、継続的に利用した者は 139 名、しなかった者は 241 名であった。両者にどのような差があるかを検討するため、課題の進行状況を χ^2 乗検定により比較した (Table 5)。その結果、有意な差がみられたため

($\chi^2=11.70, df=4, p<.05$)、調整済み残差を確認したところ、継続的な利用者が、進行状況 5 のセルにおいて期待値より少なくなること ($p<.05$)、および進行状況 4 のセルで多くなる傾向が示された (セルの度数が少ないため、Fisher の正確検定でも確認したところ、同様に有意な値が得られた)。すなわち、ほとんど完成に近い状態より、その一歩前のひと通り書けた状態での相談が継続的な利用につながりやすいと考えられる。

まとめと今後の課題 分析の結果、教員指示による利用学生も、自発的な利用学生と同じ程度にラボを継続的に利用していた。利用のきっかけは自発的でない場合でも、ラボで受けた支援により、その後継続的にラボを利用することが示された。また、教員

指示による利用では、ある程度文章作成が進んだ段階での相談が多くなること、および、ある程度文章作成が進んだ段階での相談は継続的な利用につながるという傾向も示された。

今後は、ラボ利用の有効性を明らかにするため、課題の進行状況に応じたラボでの支援内容と、その支援によって文章がどう改善したのかを質的に検討する必要がある。

Table 4 教員指示別の平均値(標準偏差)

	教員指示	
	あり	なし
継続利用回数	0.68(1.13)	0.77(1.32)
進行状況	3.33(1.36)	2.30(1.41)

Table 5 継続利用の有無による課題の進行状況別度数(人)

進行状況	継続利用		合計
	あり	なし	
1	32	56	88
2	10	20	30
3	14	16	30
4	64 (+)	84 (-)	148
5	7 (-)	36 (+)	43
合計	127	212	339

表中の(+)(-)は、そのセルが期待値より度数が多い/少ないことを示す

参考文献

- 野村優・中嶋梓・鹿島萌子 (2015) ライティング・サポート・デスクの理念と実践—立命館大学の事例報告— 第 21 回大学教育研究フォーラム発表論文集, pp.50-51.
 佐渡島紗織・太田裕子(編) (2013) 文章チュータリングの理念と実践 早稲田大学センターでの取り組み ひつじ書房, pp.2-10.